

2022/4/3

## ヨハネの黙示録 講解メッセージ②

### 『黙示録を読むに当たって－神の国は来たのか？－』

ヨハネの福音書・手紙・黙示録には、それぞれテーマがあり、福音書は「永遠のいのち」、ヨハネの手紙は「互いに愛し合うクリスチャン生活」、そして黙示録は「クリスチャンが会う苦難と希望」について書かれています。黙示録が語る終わりの日、それは、神が悪を滅ぼして神の主権が勝利する日、すなわち、神の国が成就する日です。これは、旧約聖書の預言の成就でもあります。この「終わりの日」の解釈については、大きく二つの立場があります。一つは世界の歴史が終わる時、もう一つはこの地上での個人の生涯が終わる時という解釈です。かつては、黙示録はこれから起きる世界の終わりについて書かれているという考えが主流でしたが、この見方は聖書的な根拠が薄く、聖書は聖書によって理解するというプロテスタントの原点から大きく外れます。そのため、20世紀になり、C・H・ドッドやブルトマンらがプロテスタントの原点に立ち返って、黙示録の新たな見方を示しました。ここからわかることは、黙示録はクリスチャンにとって希望の書であるということです。ところが、間違った読み方によっては、ただ恐怖を与え、異端を生むものにすらなってしまいます。ですから、聖書は神の国についてどのように教えているのか、聖書の原点に立ち返って正しい理解を求めていきましょう。

#### ■ダニエル書から学ぶ神の国

「終わりの日にあなたの民に起こることを悟らせるために来たのだ。なお、その日についての幻があるのだが。」(ダニエル 10:14)

「私がまた、夜の幻を見ていると、見よ、人の子のような方が天の雲に乗って来られ、年を経た方のもとに進み、その前に導かれた。この方に、主権と光栄と国が与えられ、諸民、諸国、諸国語の者たちがことごとく、彼に仕えることになった。その主権は永遠の主権で、過ぎ去ることがなく、その国は滅びることがない。」

(ダニエル 7:13-14)

「彼は、いと高き方に逆らうことばを吐き、いと高き方の聖徒たちを滅ぼし尽くそうとする。彼は時と法則を変えようとし、聖徒たちは、ひと時とふた時と半時の間、彼の手にゆだねられる。しかし、さばきが行われ、彼の主権は奪われて、彼は永久に絶やされ、滅ぼされる。国と、主権と、天下の国々の権威とは、いと高き方の聖徒である民に与えられる。その御国は永遠の国。すべての主権は彼らに仕え、服従する。」

(ダニエル 7:25-27)

まず、旧約聖書は「神の国」について、どのように教えているのでしょうか。

ダニエル書は旧約聖書の中の黙示文学で、救い主についての預言が黙示で記されています。これらの預言は、イエス様がこの地上に来られる前に書かれたものですが、イエス様の生涯とぴたりと合致します。「人の子」とは、イエス・キリストを示し、「いと高き方に逆らい、聖徒を滅ぼそうとする者」は、悪魔です。「ひと時とふた時と半時の間」とありますが、ひと時を1年と考えると、イエス様が活動された3年半という期間と一致します。その後、イエス様は十字架に架かり、悪魔を滅しました。

ダニエル書が「神の国」について教えていることは、朽ちることのない永遠の国であるということです。この世界に永遠はありません。つまり、「神の国」とは、この世界につくられる国ではありません。

「あなたがたは、わたしが地上のことを話したとき、信じないくらいなら、天上のことを話したとて、どうして信じるでしょう。だれも天に上った者はいません。しかし天から下った者はいます。すなわち人の子です。」(ヨハネ 3:12-13)

「そこで、子たちはみな血と肉とを持っているので、主もまた同じように、これらのものをお持ちになりました。これは、その死によって、悪魔という、死の力を持つ者を滅ぼし、一生涯死の恐怖につながれて奴隷となっていた人々を解放して下さるためでした。」(へブル 2:14-15)

イエス様をご自分を「人の子」と呼んでいることから、「人の子のような方が天の雲に乗って来られる」という預言は、「神が人として来られる」ということの象徴的表現だと解釈できます。そして、へブル書は、はっきりと、イエス様が人として来られたことで旧約聖書の預言が成就したと教えています。

当時の人たちは、ダニエル書が預言している神の国とはダビデの王国の再来だと思っていました。ですから、イエス様が革命を起こして悪であるローマを滅ぼし、再びイスラエルを繁栄させて下さることが預言の成就だと思っていたのです。しかし、イエス様はこの地上に王国を築きに来たわけではありません。聖書が教える神の国は、この世のものではなく目に見えないものです。その神の国はもう来たと言われているのですから、次にすることは、私たちがそこに移動することです。この前提に立ってヨハネの黙示録を理解しないと、いつ悪魔と戦う戦争が起きるのかと恐れが募ることになってしまいます。ヨハネの黙示録で「悪魔を滅ぼす」とあるのは、私たちの肉体の死のことです。私たちの肉体をつかさどっているのは悪魔だからです。

聖書は、悪魔という死の力を持つ者をすでに滅ぼしたと教えています。つまり、ダニエル書に書かれている預言はすでに成就し、終わりの日は来たのです。

## ■神の国の成就是いやしにある

悪魔のしわざで死が入り込んだことで、人は罪を犯すようになりました。また、死によって永遠に生きることができなくなりました。神のいのちによって造られた私たちは、永遠に生きることを知っているのに、それができなくなったのです。これが私たちの不安の原因です。そのため、人は不安から目を背け、見える安心に喜びや楽しみを見出そうとします。「罪」という言葉の原語は、「的を外す (ハマルティア)」という言葉です。不安から目をそらしてこの世の楽しみに向かうことが罪なのです。

私たちの心を最も喜ばせるのは、人から良く思われることです。これによって自分を安心させようとするのが、罪です。そこから生まれるものは比較と争いです。戦争もここから生まれるのです。二番目は富です。お金がないと不安になります。その結果、富の争いが起きます。しかし、私たちは富の安心から逃れたくても逃れられません。誰もがそうです。三番目は、快樂です。あらゆる快樂によって、人は現実を見ないようにしています。

こういう状態を「罪人」と呼ぶのです。不安から目をそらさずにいようとしても、恐怖が大きすぎてどうすることもできません。そして、イエス様はこのような状態に陥っている私たちを「病人」と呼びました。死の宣告を受けたその時から、恐怖に陥った私たちは見える安心をむさぼるようになってしまったのです。つまり、私たちにとっての悪とは死です。死が最後の敵であり、その死を司る者が悪魔です。ですから、「神が悪と戦う」とは、死を滅ぼすことであり、悪魔を滅ぼすことです。そして、死から救い出すとは罪人の病をいやすということなのです。

私たちは死というウィルスが入り込み、自分ではどうすることもできない病人です。死を待つまでの間、不安と恐怖から目を背け、私たちは様々な罪を犯します。死を待つしかない病人にとって、必要なのはいやし主です。そこで、神はダニエル書の預言を語られた後、次のような預言をしておられます。

「私たちの聞いたことを、だれが信じたか。主の御腕は、だれに現れたのか。彼は主の前に若枝のように芽ばえ、砂漠の地から出る根のように育った。彼には、私たちが見とれるような姿もなく、輝きもなく、私たちが慕うような見ばえもない。彼はさげすまれ、人々からのけ者にされ、悲しみの人で病を知っていた。人が顔をそむけるほどさげすまれ、私たちも彼を尊ばなかった。まことに、彼は私たちの病を負い、私たちの痛みをになった。だが、私たちは思った。彼は罰せられ、神に打たれ、苦しめられたのだと。しかし、彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために砕かれた。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。」(イザヤ 53:1-5)

これが人の子の姿です。これは、イエス様が十字架につけられるまでの姿を預言したものです。現実に来られる人の子は、英雄でもスターでもありません。

イエス・キリストは、私たちの病をいやすために十字架に架かったと聖書は教えます。ところが、人々は、イエス様は十字架で私たちの罰を代わりに受けたのだと誤解しました。そ

うではありません。私たちの罪を背負うために十字架に架かられたのであって、罰を受けるためではないのです。私たちの病とは罪です。私たちの病を背負ったとは、私たちの罪を背負ったということです。つまり、悪に勝利するとは、人々をいやしたということです。これがダニエル書の預言の具体的な内容です。

なぜイエス様は私たちの罪を取り除くために十字架に架かったのでしょうか。私たちに罪をもたらした死とは、神が認識できなくなることです。その結果、神と人は分離してしまいました。人は死によって有限性になったため、永遠性の神を認識することができなくなったからです。そして、そのために、神に愛されている自分がわからなくなりました。このことが私たちの不安をあおっています。肉体の死という不安以上に私たちを苦しめているのは、神に愛されている自分が見えないということです。これが私たちの不安の根本原因です。そのことの不安から愛される自分を目指し、人から良く思われることで死の恐怖から逃れようとするようになったのです。とにかく人から愛されたい、認められたいという欲求を「承認欲求」と言いますが、人間の行動のすべては承認欲求に支えられています。これが私たちを苦しめている具体的な病です。

イエス様は十字架に架かる前、弟子たちに「人が友のために命を捨てるよりも大きな愛はない」と言いました。イエス様は十字架に架かることで、あなたをどれだけ愛しているかが見えるようにしたのです。それが、私たちの罪、すなわち死の恐怖を背負うということだったのです。イエス様の十字架は、私はあなたをこれほど愛している、だからあなたを見捨てることなどないというメッセージです。この愛で愛されていることを知ることで、私たちはいやされるのです。私たちをいやす薬はこの十字架しかありません。ですからイエス様をいやし主というのです。いやしはギリシャ語で「ソーズー」と言います。「ソーズー」は、「救い」とも訳されますが、本質の意味はいやしです。神はイザヤを通してダニエル書の預言をこのように詳しく預言されました。「人の子」とは私たちをいやす方であり、神の国の成就とは神が私たちをいやしてくださることでもあるということです。

## ■いやし主なるイエス・キリスト

さて、バプテスマのヨハネが獄中から、イエス様が約束されたいやし主なのか確かめるために弟子を遣わした時、イエス様は次のようにお答えになりました。

「さて、獄中でキリストのみわざについて聞いたヨハネは、その弟子たちに託して、イエスにこう言い送った。「おいでになるはずの方は、あなたですか。それとも、私たちは別の方を待つべきでしょうか。」イエスは答えて、彼らに言われた。「あなたがたは行って、自分たちの聞いたり見たりしていることをヨハネに報告しなさい。目の見えない者が見、足のなえた者が歩き、ツアラアトに冒された者がきよめられ、耳の聞こえない者が聞き、死人が生き返り、貧しい者たちに福音が宣べ伝えられている。だれでもわたしにつまずかない者は幸いです。」（マタイ 11:2-6）

イエス様はヨハネの弟子たちに、イエス様がしておられることを報告するようと言われました。それは、いやしです。それでヨハネは、イエス様こそがダニエルやイザヤを通して預言された人の子なのだということを知るわけです。つまり、神の国は成就したということ、ヨハネはここで悟ったのです。

「イエスは、この十二人を遣わし、そのとき彼らにこう命じられた。「異邦人の道に行ってははいけません。サマリア人の町に入ってははいけません。イスラエルの家の失われた羊のところに行きなさい。行って、『天の御国が近づいた』と宣べ伝えなさい。病人をいやし、死人を生き返らせ、ツアラアトに冒された者をきよめ、悪霊を追い出さなさい。あなたがたは、ただで受けたのだから、ただで与えなさい。」

(マタイ 10:5-8)

イエス様は弟子たちに、病をいやすことで神の国が来たことを証明するようにと遣わしておられます。いやし主が来るのが、神の国が来るということだからです。

「天の御国が近づいた」には、現在完了形が使われており、近づいた状態が完了したことを表しています。つまり、完全に近づいた状態、「来た」という意味です。本当ならばここは「来た」と訳さなければなりません。その理由があるのです。

「しかし、わたしが神の御霊によって悪霊どもを追い出しているのなら、もう神の国はあなたがたのところに来ているのです。」(マタイ 12:28)

ここは、「達する」という言葉が1回限りの過去を表す表現が使われているため、「来た」としか訳せません。つまり、このふたつの御言葉を比較して明らかなのは、悪霊が追い出されて病がいやされている状態は、神の国が来たことを表しているということです。

イエス様はいやし主として来られ、病人をいやすことによってその約束が成就したとはっきり述べておられます。つまり、聖書に書かれている預言はすでに成就し、神の国は来たということを私たちは正しく把握する必要があります。神の国は死が排除され、死がない国です。いのちだけの国です。イエス・キリストを信じる者は死からいのちに移されているということです。神の国はイエス様と共に来て、イエス・キリストを信じた者は死からいのちに移されているということなのです。

つまり、あなたにとって終わりの日はもう来て、古い自分は死んだのです。それは死に支配される自分です。今私たちは神の国に移され、いのちがあなたを支配しています。しかし、現実にはまだ死に支配されている体も残っていて、その間、苦難や誘惑に会うという苦勞もします。しかし、心配する必要はありません。あなたはすでに死からいのちに移されているから、最後は必ず神の国に引き上げられるのです。それがヨハネの黙示録の中で述べられているのです。

イエス様の福音書の中で預言は、そういうことです。「見える現状がどうであれ、私が来たことで終わりの日は来た。あなたはわたしと一緒にいのちの世界に入れられており、もう私

はあなたをとらえて離さないから何も心配する必要はない。」と語っておられるのです。

イエス様が病をいやしているということは、神の国は来たということです。それはすべてイエス様が語られたこの言葉に集約されます。

「まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしのことばを聞いて、わたしを遣わした方を信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきに会うことがなく、死からいのちに移っているのです。」(ヨハネ 5:24)

この御言葉は現在完了形です。つまり、イエス・キリストのことばを聞いて信じている者は、永遠のいのちを持っていて、裁きに会うことがなく、死からいのちに移った状態にあるのです。つまり、あなたはもう神の国に入れられた状態にあるということです。これが、イエス様が私たちに一番伝えたかった福音です。死の世界ではまだ肉の行いで苦しんでいるが、それは病気であって、主は死を滅ぼし、完全にいやしてくださって、あなたを天に入れるから何も心配しなくてよいというのが、黙示録の意図です。神の国という聖書の約束は、イエス・キリストを通して成就したのです。

「神の国は来た」ということを正しく理解していないと、黙示録を理解することはできません。黙示録は、各自が肉体の死を迎えるまでの様々な試練、苦しみを描いていますが、最後は必ず天国に行くことを教えている希望の書なのです。